

優耶は生真面目な表情で、政司の今後を想像する。

教授の講義に耳を傾けている姿、建築士の試験問題を前に呻く姿、就職後にスーツ姿で事務所に向かつたり、ヘルメットを被つて工事現場で指揮したり、バーで仲間と飲みながらも、女性たちの熱い視線を気持ちよく無視している「俺様」な様子。

きっと、どれもこれも実現するだろうと、優耶は苦笑を浮かべながらそう思った。

「だから優耶……俺と一緒にアメリカに行こう」

何を言つてるんだ？ このクールビューティーは。

だが、この台詞せりふはいただけない。

優耶が想像する政司のアメリカライフには、自分はまったく存在していないのだ。
「な……？ 俺と一緒に……」

政司が「俺と一緒に暮らしてくれ。すべては俺が面倒見る」と付け足す。

この男は、時々とんでもない「お坊ちゃん発言」をする。自分への愛と厚意と善意から出でいる台詞しゃなのを知つていて、優耶は頭ごなしに叱ることはできなかつた。
だから話をがらりと逸らすしかない。

優耶はふと車窓に視線を向け、「雪だるまをいっぱい作りたいな……」と大きな声で呟く。

「雪だるまなら、俺がいくらでも作つてやる。だから……」

「駅弁を食べながらする話じやないし、アメリカ行きに関しては話し合つた。お前も納得して

いたはずだ。どうして今頃になつて蒸し返すんだ……？」

頭ごなしに叱りつけるでなく、優しく語りかける。

これはもともと穏やかな優耶の特技だが、最近はそれに磨きがかかつっていた。政司が名も知らぬ一年生に「黒騎士様」と呼ばれているのと同じく、優耶は「菩薩様」「観音様」と呼ばれている。

その菩薩が、黒騎士に「どうして？」と尋ねた。

「一緒にいたいから……それだけでは駄目なのか？ 渡米まで二年だ。俺はその二年の間に、日本でやるべきことをすべて終わらせる……そう思つて、資料を取り寄せて手にした途端にすべてを実感した。俺は本当に前と離ればなれになるんだと。自分の思い描いた未来を突き進むのだと。……そして、果たして俺に遠距離恋愛ができるのかと不安になつた。優耶なしで生きていけるのか自信がない。何年も離ればなれなんて初めてじゃないか」

政司はそこまで言つてペットボトルの茶を飲み、割り箸を持つ。

優耶もそれに倣い、二人は無言で弁当を食べ始めた。

さつきまで政司を見てはしゃいでいた女子たちは、今は食事をしながら自分たちの「恋の話」に夢中になっている。

どこかのグループの笑い声や、缶ビールのプルトップを開ける音が聞こえた。車窓は童話のワンシーンのような雪景色で、飽きることはない。

哀愁たっぷりの警笛に包まれると、その気になれば、どこまでも列車で行けそうな気がした。年末も押し迫ってきたこの時期に、恋人とのんびりできるなんて幸せだと、優耶は思つていた。就職をしたら今までのようになよつちゅう会えない。だからそれまでは、二人で一緒にいられるだけいようと、心に決めていたのだが。

「……空回り、してしまつたな」

優耶は俯いたまま、掠れた声で言う。

政司は気まずい表情で顔を上げた。

「二人で楽しい思い出を作ろうと思つてたのは俺だけか」

「……すまん」

「これから秘湯の温泉宿に行こうっていうときに、そんな話をするとは思わなかつた」

「今までずっと、言うタイミングを掴めなかつた。しかし俺は……こんなにも空気を読めない男だつたとは……」

政司は心の底から申し訳なさそうに言い、自分の弁当に入つてゐるトンカツの一一番大きな一切れを優耶の弁当に乗せる。

「あ」

「違う弁当を買って、二人でおかずの分けっこをしようって言つたじやないか」

そうだった。弁当の見本はどれもこれも旨そうで、一つに絞りきれなかつた結果が「おかげ

の半分こ」だつたのだ。

優耶は小さく頷いて、サワラの西京焼きを政司の弁当に乗せた。

「ちょ、優耶。それはお前のメインおかずだろ？ 半分でいい。全部寄越すな」

「……一人で、旅の思い出をたくさん作ろうな？ 僕はカメラマンとして、お前を山ほど撮つてやる」

優耶は深く頷き、「ではさつきのアメリカ云々に関しては封印だ。いいな？」と政司に釘を刺した。

「いや、あの、それは……話を振つたのは優耶だと思うんだが」

「元を辿れば、ちゃんと言つておかなかつた政司が悪い」

「……俺のせいか？ 俺だけか？ 俺はそもそも……」

政司が渋い表情を見せたので、優耶はずいと彼に顔を寄せて大胆なことを囁いた。

「早く機嫌を直しなさい。……温泉宿では、きっと凄い思い出が作れるだろうな。特に夜。まだ二人でしてないことが山ほどあつたはずだ。俺はきっと、拒んだりしないと思うぞ」

優耶は政司を見つめてふわりと微笑む。

誰もを癒す素晴らしい微笑みだが、優耶はそれに加えて、政司の膝に自分の膝をそつと擦りつけて甘えてみせた。

これは恋人からのエロいお誘いだと理解した政司は、すぐさま機嫌を直して悪役美形のよう
にニヤリと微笑む。

反対に優耶は、耳まで赤くして「少々、やり過ぎたか」と吐息を漏らした。

「ビールを飲みたくなつた」

「何だ突然」

「浮かれてお前に襲いかからないよう、アルコールで欲望を発散する」

そんなことができるのだろうかと思ったが、政司はテーブルに弁当を置いて自動販売機に向
かって歩き出す。

その後ろを、数名の女子たちが携帯電話を持つて追いかけて行くのを見たが、優耶は気にな
らない。彼女たちが何を言い、政司がどう返事をするかは長年の経験で分かる。

……相手を泣かすようなことは言わなくなつたからな。

政司よりも先に戻つて来た女子たちは「写メだけかー」と残念そうにしていたが、誰も泣い
ていなかつた。むしろ潔い顔で「美形ファイルに入れておこう」と笑つている。
女子強い。

優耶はそんな事を思つて苦笑する。そこへ缶ビールを何本も持つた政司が戻つて来た。

「一緒に飲むぞ」

「こんなにいっぱい、定価で買って」



政司は、優耶のテーブルの上に缶ビールを次々と並べ「車内だから定価より高かった。しかし旅には缶ビールとチーカマだ」と断言する。

優耶は「そういうものか」と苦笑を浮かべた。

「ビールを持つて車窓を眺めろ。写真を撮ってやる」

政司はそう言うと、バッグの中から愛用のデジタル一眼レフカメラを引っ張り出す。「いきなりそんなことを言われても」

それでも優耶は、政司の指示に従つて缶ビールのプルトップを開けた。

「もつと自然に」

だつたら、わざわざ写真を撮ると宣言せずに勝手に撮れよ。

優耶は心の中で突つ込みを入れ、窓の外に視線を向けながら一気にビールを飲んだ。

「オッサンみたいな飲み方をするな」

「政司はうるさい」

優耶はカメラのレンズに顔を近づけ、「まだ弁当も途中だ」と文句を言う。

「ピントが合わなくとも、お前は可愛いな」

政司はカメラ越しに優耶を見たまま、真面目な声で言つた。

これは冗談ではない。

優耶は耳まで顔を赤くし、「なんでそんなキザなことを」と俯く。

「その顔は、なかなかいい」

やめろ、撮るな……と言つても聞くような男ではない。

優耶は仕方なく、政司が満足するまで被写体になり続けた。

まだ誰もこの位置で下車していないのか、それとも雪で隠されてしまったのか、目の前のホームは白い絨毯のよう^{じゅうたん}に雪で覆われていた。

優耶は「勿体ないなあ」と言いつつワークブーツの靴跡をつける。

ここで降りる乗客はかなり少ないようだ。

他の乗客の殆ど^{ほとん}は、車内から「有名な温泉街は終点にあるのに、どうしてここで降りるんだろう？」という顔で、政司と優耶を見ている。

確かに、そう思わざるを得ない、殺風景で寂しげな駅だ。

温泉街によくある「ようこそ○○温泉へ！」という看板も見あたらない。

「物凄い注目度だな。……本当にここで降りていいんだよな？」政司

「任せろ。……穴場の温泉は、穴場だけにあまり知られていないということだ」

二人はニットとカーゴパンツの上に薄手のダウンジャケットを羽織り、ホームから駅を見渡